

審査の結果の要旨

氏 名 ペリー 史子

論文題目 アーバン・インテリアの空間構成に関する研究
－実態・意識・感覚に基づく実証的分析－

本論文は、都市公共歩行者空間を、内空間、外空間に区分し、内部性・外部性という質的な空間特性を加え、内空間および、内部性の高い外空間をアーバン・インテリアと規定して、都市公共歩行者空間を捉え、その特性やあるべき方向性を明らかにし、その新しい地平を切り開くことを試みるものである。

都市公共歩行者空間は重要であり、近年多様な質の高い歩行者空間がつくられてきているが、このような新しいタイプの歩行者空間は、従来の枠組みでは捉えきれないという背景がある。

本論文は全5章で構成される。

第1章では、本論文の背景、目的、研究対象を明らかにしている。

第2章では、アーバン・インテリアの事例によりその変遷を概観した。

まず、文献分析から、アーバン・インテリアに求められる空間性として、内部性（保護性、安全性）、外部性（好ましい自然性、眺望性）、利便性、ヒューマン・スケール性を導き出した。

次に、古代ギリシアから現代に至るまで歴史を展望した。採光によって空間の作られ方は異なり、アーバン・インテリアは直接光期、透過自然光期、電気照明期、ポスト人工照明期に分類でき、日本の内空間アーバン・インテリアにおいて、空間の壮大化が見られることを導き出した。外空間アーバン・インテリアは、歩行者占有性、空間演出装置による人のスケールへのスケール・ダウン、内空間アーバン・インテリアとの繋がりがあるとした。日本における近年の傾向として、空間の壮大化、及び、内空間・外空間アーバン・インテリアの総合化を導き出した。

アーバン・インテリアは、多様な平面・断面のデザイン、スケールがあること、結節空間のデザインは空間の一体化に影響を及ぼすこと、その機能的特性は、広場（交流の場）、通路、ショートカット、ネットワークに分類できること、歴史的にも多様な目的や手法をもって形成されてきたことを明らかにした。

第3章では、日本における代表的アーバン・インテリアであり都市計画的にも意義の高い地下空間（地下街、地下通路）を対象として人間的意味（利用者の意識）を現地意識調査によって分析し、今後の空間構成やデザインの方向性、可能性を示した。

地下街空間における地下意識は、下りるという行為や知っているという事実、及び、「光がない」「狭い」と言う空間自体の明るさや規模から生じており、空間の広さや

デザインの操作、空間構成によって、否定的なイメージを払拭する可能性を示した。新しいタイプの地下街空間の主イメージは、「広く、明るく、きれい」であり、外空間のように広く、自然光や空が持ち込まれて屋外のように明るいということを示した。

次に、距離の長い地下連絡通路を対象とした意識調査から、外空間である地上と比較すると、外空間は、雰囲気や移り変わりという全体性や眺望性に注目しているが、内空間では床や壁や照明、オブジェという空間構成要素や個別的空間等によりとらえている事を明らかにし、歩行時間は、地下空間の方が地上空間に比べて長く感じられ、その主要因として、風景の単調さを指摘した。

第4章では、第3章の結果を踏まえ、空間を構成しているフィジカルな要素・要因と人の空間感覚との関係を実験調査から明らかにし、空間デザインの指針を挙げた。

仮想現実空間を用いて広がりに対する感覚と時間的感覚についての空間評価実験を実施し、アトリウム空間において広がり感をもったデザインをするためには、高さよりも幅を重視する必要がある、また、透明なガラスを使用することの有効性を立証した。一方、ガラス素材が使用できない場合にも、照明等の工夫によって頭上の開放感を演出できれば広がり感を増大させることを明らかにした。同じ空間であっても、天井のガラス面が多く見えることによる透明性、構造体が多く見えない事による空間の軽やかさは広がり感評価に影響を与え、構造体細部のデザインの重要性を示唆した。

時間的感覚に関しては、地下通路に面して設けられている隣接するビルへの地下レベルのエントランスのデザインによって、歩行時間を短く感じさせることが可能であることを明らかにした。アーバン・インテリアの結節空間のデザインの工夫が必要であることを示唆した。

第5章では、第2章から第4章までの結果をまとめ、本研究の意義、今後の課題・発展性を述べた。

以上のように本論文は、アーバン・インテリアの実態と特性を明らかにし、アーバン・インテリアの進むべき方向性やアーバン・インテリアの空間構成と利用者の空間感覚に関する具体的なデザイン指標を現地調査・実験調査に基づいて示すことができた。

本論文は、今後の都市公共歩行者空間の計画に重要な知見を提示するものであり、建築計画学の発展に大いなる寄与を行うものである。

よって本論文は博士（工学）の学位請求論文として合格と認められる。